

# これだけは知っておきたい！ 「CEFR」入門

名古屋大学名誉教授 野口裕之

(株式会社ハピラル・テストソリューションズ Academic Research Fellow)



# もくじ

1. はじめに
2. CEFRとは何か
3. CEFRの理念と開発の経緯
4. CEFRは「評価基準」か？
5. CEFRと言語テストとの関連づけ



# 1. はじめに



最近の日本では、CEFRを共通の英語能力基準として、複数の大規模英語テストを相互比較することが注目されている。

## 各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	GTEC for STUDENTS	IELTS	TEAP	TEAP CBT	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)				8.5-9.0					
C1	CAE (180-199)	1級 (2630-3400)	1400		7.0-8.0	400	800	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1級 (2304-3000)	1250-1399	980 L&R&W 810	5.5-6.5	334-399	600-795	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2級 (1980-2600)	1000-1249	815-979 L&R&W 675-809	4.0-5.0	226-333	420-595	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2級 (1284-1800)	700-999	565-814 L&R&W 485-674	3.0	150-225	235-415		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3級-5級 (419-1650)	-699	-564 L&R&W -484	2.0					200-380 L&R 120~ S&W 80~

1. CEFRとは何か？
2. 各試験団体の得点をどのようにして**CEFR**の**C2～A1**に関連づけたのだろうか？
3. 各試験団体の得点を互いに比較することが出来るのだろうか？



## 2. CEFRとは何か



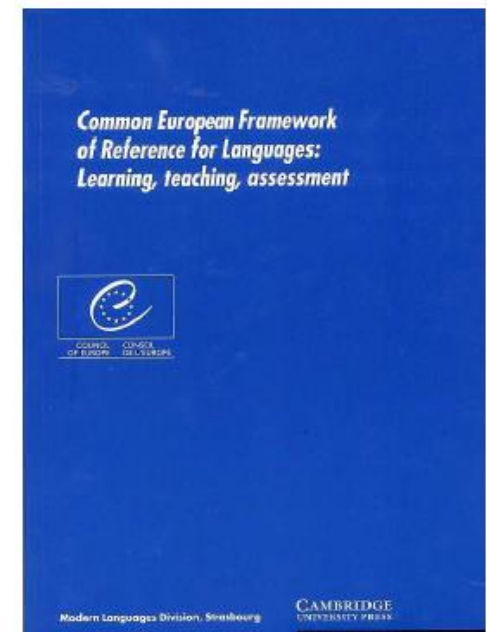
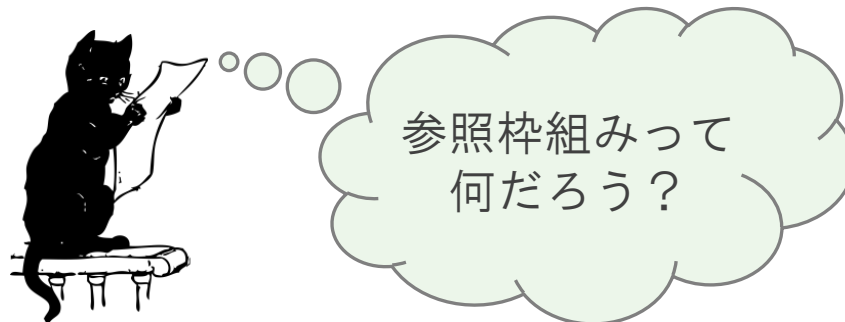
# CEFRとは

**C**ommon **E**uropean **F**ramework of **R**eference  
for Languages: Learning, teaching, assessment  
のアクロニム (acronym)



**CEFR**

CEFRとは、欧州域内で国や言語の違いを超えて、言語（外国語）教育専門家（テスト開発機関や行政担当官を含む）等が言語学習、教授法、そして評価法に関する相互理解およびコミュニケーションを促進するための基盤となる参照枠組みを提示した文書のこと。





# CEFRと欧州評議会

- ▶ 欧州評議会（Council of Europe）が1997年に開始した言語教育プロジェクトの成果として、2001年に英語版CEFR（Council of Europe, 2001）が出版された。
- ▶ これを皮切りに CEFR は英語以外の言語版も順次出版されているが（2017年現在40言語版）、それらは英語版を各言語に単に翻訳したのではなく「基本的な線は確保しながらも、各言語の視点から記述している。」（吉島等，2004）点に特徴がある。



## 2017年版40言語の内訳

### *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEFR)*

#### **40 Language Versions**

Arabic, Albanian, Armenian, Basque, Bulgarian, Catalan, Chinese, Croatian, Czech, Danish, Dutch, English, Esperanto, Estonian, Finnish, French, Friulian, Galician, Georgian, German, Greek, Hebrew, Hungarian, Italian, Japanese, Korean, Lithuanian, Macedonian, Moldovan, Norwegian, Polish, Portuguese, Russian, Serbian (Iekavian version), Slovak, Slovenian, Spanish, Swedish, Turkish and Ukrainian.

**Relevant national authorities and/or publishers are responsible for dissemination.**

- ▶ 欧州評議会は「一つの欧州」を目指して、人権、民主主義、法の支配、文化的協力の分野で国際社会の基準策定を主導する国際機関として、**1949**年にフランスのストラスブール（アルザス州）に設立された。
- ▶ 当初の加盟国は、フランス、イタリア、英国、ベルギー、オランダ、スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、アイルランド、ルクセンブルクの**10**カ国。現在は**47**カ国。
- ▶ 日本は**1996**年**11**月に米国，カナダに次いで**3**番目の欧州評議会のオブザーバー国となっている。



# 3. CEFRの理念と開発の経緯



# CEFRの理念

1. 欧州市民の相互理解促進のために、市民が母語以外の言語も必要に応じて使用できるようになるという**複言語主義**と、母語話者並みを必ずしも目標とはせず、必要な能力を身につける**部分的能力**の許容
2. 学校教育終了後も自律的に学習でき、**生涯学習**を続けられる学習者支援
3. **欧州域内での移動に対する言語学習の継続性確保**
4. 教師中心主義ではなく**学習者中心主義の立場**
5. **行動中心主義（○○ができる）の言語教育観**

# CEFRの概要

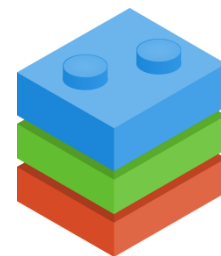
CEFRでは具体的な言語能力水準を「共通参照レベル」として、A・B・Cの3レベルを設定している。さらに、各レベルを2つずつに分けて、全部で6段階の言語能力水準としている。

共通参照レベル		言語能力水準	
A	基礎段階の言語使用者 (Basic User)	A1	Breakthrough
		A2	Waystage
B	独立した言語使用者 (Independent User)	B1	Threshold
		B2	Vantage
C	熟達した言語使用者 (Proficient User)	C1	Effective Operational Proficiency
		C2	Mastery

これら6段階のそれぞれに対して、次の6つの言語行動の諸側面を組み合わせ、格子状に配列し、それぞれのセルに具体的にできる言語行動を能力記述文（**Can-do Statements**）で例示している。

- 全体的な尺度（**global scale**）
- 聞くこと（**Listening**）
- 読むこと（**Reading**）
- 話すこと（やりとり）（**Spoken interaction**）
- 話すこと（表現）（**Spoken production**）
- 書くこと（**Writing**）

一般に、言語能力は「聞く」「読む」「書く」「話す」の4技能で表わされることが多いが、「話す」技能を「話す（やりとり）」と「話す（表現）」に分けている点特徴的である。



## ◆CEFRにおけるレベルと技能のグリッド

	全体的な 尺度	理解すること		話すこと		書くこと	
		聞くこと	読むこと	やりとり	表現	書くこと	
C2	例 1			例 2			
C1							
B2							
B1							
A2							
A1							



## ● 例 1 全体的な尺度

C2	聞いたり読んだりしたことを、ほとんどすべて苦勞せずに理解できる。／聞いたり読んだりした様々な情報源から得た情報を要約し、その議論や説明を首尾一貫した形で再構成することができる。／より複雑な状況においても、自分の考えを即座に非常に流暢かつ正確に、細かいニュアンスを区別しながら表現することができる。
C1	多種多様な長く難しいテキストを理解し、含意まで認識できる。／あからさまに言葉を探したりすることはなく、流暢に即座に自分の考えを表現できる。／社会的、学問的、専門的な目的のために、言葉を柔軟かつ効果的に使うことができる。／文章構成、接続表現、約束表現を十分に使い、複雑な話題について明確でよく構成された詳しいテキストを産出できる。
B2	自分の専門分野の技術的議論も含め、具体的な話題や抽象的話題についての複雑なテキストの要点を理解できる。／母語話者との通常のやりとりが、互いに負担なく、ある程度流暢かつ自然にできる。／幅広い話題について明瞭で詳細なテキストを産出し、多種多様な選択肢についてその長所と短所を挙げながら、時事問題についての自分の考えを説明できる。

## ● 例 1 全体的な尺度

B1	仕事、学校、余暇などで日常的に出会う身近な事柄についての明瞭で標準的な話の要点を理解することができる。／その言語が話されている地域を旅行している間に起こる可能性のあるたいていの状況に対処することができる。／身近で個人的に関心のある話題について、簡単なまとまった文章を産出できる。／経験、出来事、夢、希望、大望などについて記述し、意見や計画について理由や説明を手短に述べることができる。
A2	最も直接的な分野（例：個人または家族に関する基本情報、買い物、地元の地理、仕事）に関わる文や頻繁に使われる表現を理解できる。／身近で日常的な事柄についての簡単で直接的な情報交換を必要とするような、単純で決まりきったタスクにおいて意思疎通ができる。／自分の経歴、身近な環境、直接必要のある分野の事柄について、簡単な表現で記述できる。
A1	具体的な必要性を満たすために、日常よく使われる表現と基本的な語句を理解し、使うことができる。／自分自身やほかの人を紹介することができる。個人に関する詳細なこと（例：住んでいる場所、知り合い、持ち物など）について質問や応答ができる。／相手がゆっくりはっきりと話し、いつでも手助けをしてくれるならば、簡単なやりとりができる。

## ● 例2 やりとり

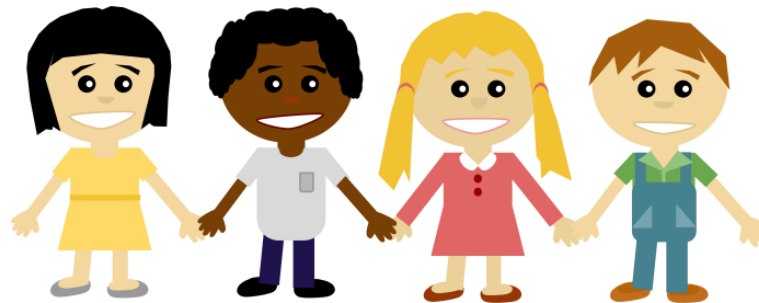
<b>C2</b>	慣用表現や口語表現を熟知しており、どんな会話や議論でも容易に参加できる。／流暢に自己表現ができ、意味の微妙なニュアンスまで正確に伝えることができる。／話している間に表現できないことがあっても、相手にほとんど気づかれずに問題を回避して、なめらかに話を続けることができる。
<b>C1</b>	ほとんど言葉に迷うことなく、流暢かつ自然に自己表現ができる。／社交目的でも職業上の目的でも、柔軟かつ効果的に言語を駆使できる。／考えや意見を正確にまとめ、自分の発言を相手の発言とうまく関係づけることができる。
<b>B2</b>	流暢に自然にやりとりをする力があり、母語話者と普通に話すことができる。／なじみ深い内容であれば、話し合いに積極的に参加して自分の見解を説明したり維持することができる。
<b>B1</b>	その言語が話されている地域であれば、旅行中に起こりうるたいていの状況に対処できる。／例えば、家族、趣味、旅行、時事問題などで、なじみ深く個人的にも関心があり、日常生活に関連したトピックであれば、準備がなくても会話に入っていける。
<b>A2</b>	なじみ深いトピックや活動に関連するものであれば、簡単で直接的なやりとりが求められる日常的な仕事の中で話し合いができる。／普通は自力で会話続けるほどの理解力はないが、ごく短い社交上のやりとりはできる。
<b>A1</b>	話し相手が言うことを繰り返してくれたりゆっくりと言い換えてくれたりして、自分が言いたいことを言い表す手助けをしてくれれば、簡単なやりとりができる。／直接必要な分野の事柄や、非常になじみのある話題について、簡単な質問をしたり質問に答えることができる。

さらに言語使用場面などについてより詳細な状況を設定して、言語能力が記述されている。CEFRの内容に関して詳しくは、**Council of Europe (2001)** および吉島・大橋**(2004)** を参照されたい。

<出典>

キース・モロウ著 和田稔ほか訳

『ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) から学ぶ英語教育』 研究社 2013年



# CEFRの開発の経緯

## ThresholdシリーズとCEFR

- Thresholdシリーズは、J.A.van EkとJ.L.M. Trim による言語（英語）運用能力の詳細な記述で、これがCEFRの能力記述文の基盤となったもののひとつである。言語機能、意味的概念、文法項目、語彙項目の詳細なリストが含まれている。
- Thresholdが1975年に最初に公刊され、その後、Waystage1990, Threshold1990, Vantageが公刊されている。（BreakthroughはEnglish Profileのウェブサイトで閲覧可能）
- Threshold1990, VantageがそれぞれCEFRのB1,B2に対応するが、その中に詳細な能力記述文が提示されている。

これらはCEFRに大きな影響を与えたもののひとつである。

投野編著（2013）を参照

# 能力記述文の尺度化

- CEFRの能力記述文は、スイス国立科学研究機関（Swiss National Science Research Council）が1993年から1996年にかけて実施したスイス・プロジェクトの成果のひとつを利用したもの。
- 300名近い教師と2800名ほどの学習者のデータをもとに項目応答理論（ニラッシュ・モデルおよび多相ラッシュ・モデル）を適用して、基礎段階の学習者から熟達した言語使用者にわたる広範囲の能力記述文を相互に比較できるように（＝垂直尺度化）、すべての能力記述文の困難度を共通尺度上にのせている。
- その結果、能力記述文を適当な段階に振り分けて示すことが可能になった。（CEFR付録B、および North & Schneider（1998）、North（2000）など参照）

# 4. CEFRは「評価基準」か？



C E F R は



**「英語」の評価基準を  
表わすものではない！**



**外国語の評価基準を  
表わすものでもない！**



# CEFRは

- 言語学習、教授法、そして評価法に関する相互理解およびコミュニケーションを促進するための基盤となる言語間に共通の参照枠組みである。
- 外国語学習者の現在の能力水準では、どのような言語行動が可能か、次の学習目標はどのようなことか、などが示される。
- しかし、特定のカリキュラム、シラバスを念頭においた評価基準ではない。
- まして、仕様の異なる英語テストの得点を等化したり、対応づけたりするものではない！

**仕様の異なる英語テストの得点を  
等化したり対応づけたりするには、  
IRTなどのテスト理論を用いて、  
科学的にデータを分析する必要がある**



# 5. CEFRと言語テストとの 関連づけ

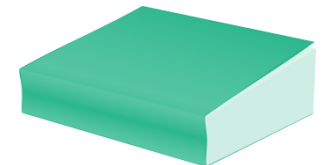


## ◆ 各種外国語能力試験とCEFRレベルの関係

CEFR	ケンブリッジ英検	TOEFL iBT*	DELTA / DALF	ゲーテ独語検定	漢語水平考試
C2	CPE		DALF C2	Goethe-Zertifikat C2	筆記 6 級
C1	CAE	総合95点以上 (C1以上)	DALF C1	Goethe-Zertifikat C1	筆記 5 級
B2	FCE	総合72点以上	DELTA B2	Goethe-Zertifikat B2	筆記 4 級
B1	PET	総合42点以上	DELTA B1	Goethe-Zertifikat B1	筆記 3 級
A2	KET		DELTA A2	Goethe-Zertifikat A2	筆記 2 級
A1			DELTA A1	Goethe-Zertifikat A1	筆記 1 級

\* <https://www.ets.org/toefl/institutions/scores/compare/>

- ▶ 外国語教育（言語教育）関係者や外国語学習者にとっては、実際に利用している言語テストが**CEFR**とどのような関係にあるかを示す情報が必要となる。
- ▶ 当該言語テストを開発している機関（テスト事業者）はその要請に応える研究を実施して結果を公開することが必要になる。
- ▶ そのために、欧州評議会の言語政策部門では、言語テストを**CEFR**に関連づけるために必要な手続き、および、その理論的根拠、技術的側面をまとめた文書を**マニュアル**として出版している（Council of Europe. 2009）。



具体的な言語テストを**CEFR**に関連づけるためには、相互に関連した4つの手続きを経ることが要請されている。

1. **Familiarization** (パネル参加者の**CEFR**に対する習熟)

特定の言語テストを **CEFR** に関連づけるプロジェクトへの**パネル参加者が**CEFR**に関する詳細な知識を確実にもつようにするための研修過程。**

2. **Specification** (テスト内容と**CEFR**の整合性評価)

パネルの構成員により、テストの測定する内容が**CEFR**の記述カテゴリをどれだけよく反映しているかを判断する。

3. **Standardization** (判断の標準化)

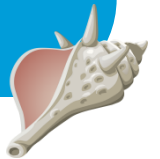
**「共通参照レベル」の共通理解が十分に得られ、かつ、それが対象となっている言語テストの判断に反映するようにする過程。**さらに、対象となっている言語テストの受験者が示した解答標本の能力レベルやテスト課題や項目標本の困難度をパネル参加者が判断する。

4. **Empirical Validation** (経験的妥当化)

対象としている**試験自体の妥当性や試験の**CEFR**への関連づけの妥当性**をテストを実施したデータをもとに確認する。




関連づけは極めて大変な作業である。  
スライドNo.29でも述べたように、  
テスト事業者はどのようにCEFRに関連づけたのかを  
公開する義務がある。



# 参考文献

- 1) Council of Europe (2001). *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Strasbourg : Council of Europe. 吉島茂・大橋理枝 訳・編 (2004). 外国語教育Ⅱ－外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠－. 朝日出版社。(原著のAppendix C: The DIALANG self- assessment scales と Appendix D: The ALTE 'Can Do' statements は含まれていない。)
- 2) Council of Europe. (2009). *Relating language examinations to the Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment (CEFR). Manual* . Strasbourg, France: Language Policy Division.
- 3) McNamara (1996). *Measuring Second Language Performance*. London and New York: Addison Wesley Longman.
- 4) Morrow, K. (ed.) (2004) *Insights from the Common European Framework*. Oxford University Press. キース・モロウ 編著 和田稔他訳 (2013). 『ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)から学ぶ英語教育』 研究社
- 5) North, B. (2000). *The development of a common framework scale of language proficiency*. New York, NY : Peter Lang.
- 6) North, B. (2005). *The Development of a Common Framework Scale of Descriptors of Language Proficiency Based on a Theory of Measurement. System*, 23, 445-465.
- 7) North, B. & Schneider, G. (1998). *Scaling descriptors for language proficiency scales, Language Testing*, 15, 217-262.
- 8) 野口裕之・大隅敦子 (2014). 『テストニングの基礎理論』. 研究社.
- 9) 野口裕之 (2015). 「第11章 大規模言語テストの世界的動向」, 李在鎬 編 (2015). 『日本語教育のための言語テストガイドブック』, くろしお出版.
- 10) Tannenbaum, R.J. and Wylie, E. (2008). *Linking English-Language Test Scores Onto the Common European Framework of Reference: An Application of Standard-Setting Methodology*, RR-08-34, ETS, Princeton, NJ.
- 11) 投野由紀夫編著 (2013) 『英語到達度指標CEFR-Jガイドブック』 大修館書店





ご清聴  
ありがとうございます  
ございました

# 講演者プロフィール



## ● 名古屋大学名誉教授 野口裕之

1952年大阪府生まれ。東京大学教育学部教育心理学科卒業、東京大学大学院教育学研究科博士課程中途退学、教育学博士（東京大学）。名古屋大学教育学部助教授、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授などを務め、2017年4月より同大学名誉教授。専門はテスト理論、言語テスト。研究テーマは、項目応答理論における尺度の等化、日本語教育におけるテストニング、ラッシュ・モデルを用いたパフォーマンス測定の尺度化、言語能力基準の開発など。

主要論文に、『共通受験者デザインにおけるMean & Sigma法による等化係数推定値の補正』、『推定母集団分布を利用した共通受験者法による等化係数の推定』、『外国語としての日本語能力測定を支えるテスト理論』、『日本語能力試験における級間共通尺度構成の試み』、『Can-do statementsを利用した教育機関相互の日本語科目の対応づけ』など（いずれも共著）、主著に『組織・心理テストニングの科学』（白桃書房）、『テストニングの基礎理論』（研究社）、『組織心理測定論』（白桃書房）、『項目反応理論』（東京大学出版会）、『研究社日本語教育辞典』（研究社）など（いずれも共著・分担執筆）がある。

